

28

平成 28 年度 事業報告書



とちぎ協働デザインリーグ

TOCHIGI COLLABORATION DESIGN LEAGUE

みんなと育むまちづくりシンクタンク

目 次

主な実施事業写真	1
1 コミュニティカレッジ 2016（栃木県コミュニティ協会）	2
2 若者の社会貢献活動参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）	8
3 企業の協働参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）	12
4 栃木グリーン・ツーリズムネットワーク推進事業（栃木県農政部農村振興課）	15
5 中山間地域元気創出事業（企業連携促進事業：栃木県農政部農村振興課）	18
6 地域活動サポート支援事業（上都賀農業振興事務所）	20

<参考>

とちぎ協働デザインリーグ 理事会・総会開催状況	22
-------------------------------	----

主 な 実 施 事 業 写 真



栃木県コミュニティ協会研修等業務

住みよい地域社会をつくるためには、一人ひとりが住んでいる地域に愛着を持ち、地域の課題について話し合い、協力して課題の解決に向けて行動を起こすことが大切です。一人でも多くの人が行動を起こせるよう、リーダー養成を目的にコミュニティカレッジを実施しています。



若者の社会貢献活動参加促進事業

各地域で活動している団体と若者とが直接出会い、つながりを深める場を設けることで、若者の社会貢献活動への関心や意欲を喚起します。また、地域における社会貢献活動の担い手確保および育成を図るべく実施しています。



企業の協働参加促進事業

企業は、人材、資金、地域とのつながりなどを持ち、協働における重要な役割を担うことが期待されています。社会貢献に取り組んでいる経済団体や市町中間支援センターと協力し、企業とNPO等との協働対話フォーラムを実施しています。



栃木グリーン・ツーリズム推進事業

農村地域におけるこれまでの「食べる」「観る」といった短期滞在型交流に、「泊まる」「体験する」「学ぶ」といった新たな要素を加え、長期滞在型交流へ発展を推進し、農村地域の活性化を図ります。



中山間地域元気創出事業(企業連携促進事業)

農地の荒廃や集落機能の低下が進行している中山間地域の活性化を図るため、中山間地域と農山村地域での地域保全活動や事業活動などに関心のある企業とを結び付け、連携した地域づくりや継続的な協働活動等を支援しています。

コミュニティカレッジ 2016 (栃木県コミュニティ協会)

I 趣 旨

住みよい地域社会をつくるためには、一人ひとりが住んでいる地域に愛着を持ち、地域の課題について話し合い、協力して課題の解決に向けて行動を起こすことが大切である。一人でも多くの人が行動を起こせるよう、リーダー養成を目的にコミュニティカレッジを実施する。

＜平成 28 年度全体テーマ：コミュニティの元気づくり ～歴史・文化・自然を活かして～＞

県内各地は、誇れる歴史や多彩な文化、豊かな自然に恵まれているが、こうした貴重な資源を地域の魅力の向上やコミュニティの元気づくりに更に活かすためには、どのような方策が必要か。そこで、地域が有する歴史・文化・自然の強みを活かしたコミュニティの元気づくりについて、地域内外の交流や多様な視点からの意見交換等を通じて探っていく。

II 概 要

【第 1 回 日光市門前カレッジ】

1 日 時：平成 28 年 9 月 3 日（土）
10：00～15：30

2 会 場：日光田母沢御用邸記念公園と周辺地域

3 参加者：40 名

4 テーマ

＜歴史・自然の中に息づく文化とコミュニティ＞

歴史や自然の中で育まれた文化を活かした取組を

NPO 法人日光門前まちづくりの活動事例等に学ぶ

5 プログラム

(1) 地区の概要及び活動の説明：NPO 法人日光門前まちづくり 理事長 岡井 健氏

(2) 門前まちあるき

田母沢御用邸発→①日光行政センター→②龍蔵寺・石屋町公園（東町）→③松原町付近→
東武日光駅→④安川町・沼尻神社角（西町）→⑤石升の道→⑥石田屋角→田母沢御用邸着

(3) 意見交換会（ワークショップ）

6 まとめ



(1) 新たな観光まちづくり

現在、全国的に進められている観光まちづくりは、従来の観光とは違い、「住んで良い、来てみて良いまちにしよう」、「住んでいる人にとって快適なまちが、実は来た人、来訪者にとっても良いまち」というように、観光地が少し変貌してきている。ところが、日光のような大観光地は、歴史の重みや世界遺産、かつてお客がどんどん集まってきた記憶など、どうしても保守的になりがちで、新しい観光まちづくり

に変えていくことが難しい。従来は、日光に来たら二社一寺を見て、あるいは華厳の滝に行き帰ってしまう、そういう観光が主だったが、一歩まちの奥に足を踏み入れてみると、面白いものが沢山見えてくる。生活の場と密着した境界線まで入って行って、地域の人たちの生活文化を見ることが楽しい。例えば、一歩奥に入ると、お洒落なカフェやギャラリーがあったり、とても気持ちの良い空間が広がっている、そういう観光まちづくりをぜひ考えてほしい。

(2) 東町・西町のまちづくり

東町は、建物をセットバックさせ、電線を地中化して歩道が広く整備され、歩いて楽しめるまちに変わったが、例えば、「まちづくり規範」のようなものを作って、最終的には「協定」にまでもっていけると素晴らしいと思う。行政と商店街との協定や住民同士の協定も、「家を造るときはこういうふう

に作ろうね」というような、少し縛りのある、住民同士の約束事みたいなものを作るのが、最高の協定と言われている。また、神橋に近いところに、かなり古くて凄く良い建物が4軒並んでいるところがあったが、あの建物をそのまま残すということが検討されても良いと思う。むしろ、歩道を後ろに回してしまうとか、道にお店や建物が出っ張っている所があっても良いという発想も必要かと思う。

また、西町については、大工町や水路、水道など、清流と静けさに感動したが、例えば、一歩路地裏に入ったところにお洒落な店があるなど、そんな展開があると奥行きが出て良いのではないか。

(3) まちあるき

NPO法人日光門前まちづくりでは、「長崎さるく」というまちあるきを研究され、日光の魅力の再発見のために、独自のまちあるきツアーを実施して、観光客等から好評を得ている。他県の例では、「熱海の温泉玉手箱」というものも面白い。市民や農家、商家、漁業者、歴史家、自然愛好家など、様々な人たちが自分でプログラムを考えてまちを案内するというコースが何十も設定されていて、そのプログラムに共鳴した人が来て参加する仕組み。ぜひ、そういうものも参考にさせていただくと良い。



◇東町◇



◇西町◇

(4) 空き店舗活用と新しい暮らしの提案

まちあるきをしてみると、表通りに空き家や空き店舗、空き地などが少し目立っていた。このような状況は、人口減少の影響で全国どの地域でも大変苦労している。こうした空き家・空き店舗対策として、例えば、日光というネームバリューと夏を快適に過ごせることを活かして、首都圏辺りからサテライトオフィスのニーズの掘り起こしをして、働く場としての日光門前というものを考えてみてはどうか。行政が、地元と協力して課題を乗り越えていければ、人口減少も歯止めがかかるのではないか。また、日光の真冬の厳しい寒さ対策ということも、一つ考えられるのではないか。例えば、豊富な木を利用して薪ストーブを導入するなど、真冬でも暖かく快適に過ごせるような工夫や、豊富な水を活かして、小水力発電など、自然のエネルギーを活用した新しい暮らしの提案というものをしていくと良いと思う。

【第2回 大田原市須賀川カレッジ】

- 1 日 時：平成 28 年 10 月 16 日（日）
10：00～15：30
- 2 会 場：大田原市須賀川出張所と周辺地域
- 3 参加者：37 名
- 4 テーマ：人を呼び地域を元気に
須賀川地区の暮らしぶりや、特産の茶を生かした
やみぞあづまっぺ協議会の活動等に学ぶ

5 プログラム

- (1) 地区の概要説明：須賀川地区区長会・雲巖寺自治会
区長 大塚 龍樹氏
- (2) 活動報告：やみぞあづまっぺ協議会
会長 鈴木 一利氏
- (3) やみぞまちあるき

須賀川出張所発→①雲巖寺→②中庵→雲巖寺→③茶畑→④旧須賀川小→⑤持仏堂→須賀川出張所着

※参考事例の紹介：那珂川町小砂 Village 協議会 事務局長 藤田 悦男氏

- (4) 意見交換会（ワークショップ）

6 まとめ

- (1) やみぞあづまっぺ協議会と地域とのつながり

やみぞあづまっぺ協議会では、地域の特産のお茶を活用した紅茶「雲巖の静謐」を通じて、地域活性化に尽力されている。また、自治会では、高齢者の見守り活動、サポートセンターなど、サポート活動をされている。そこで、あづまっぺ協議会の活動と地域の活動をつなげ、協議会の活動に巻き込むということがあると良い。例えば、カレッジの昼食をご馳走していただいたお母さんたちが、週一回お弁当を作りお年寄りに届ける、といった見守り活動なども良いと思う。地域外向けの活動だけでなく、地域の人向けの活動をしてつなげるということが、もう少しあっても良いと感じた。

また、紅茶を他の地域資源、旧須賀川小学校や中庵、持仏堂などにつなげていくと、更に活況を呈するのではないかな。例えば、地域の方の暮らしの中に、いかに紅茶を根づかせるか。暮らしの中でのお茶

の定着が、結果的に外に浸透していく。そうした地域にお住まいの方々への意識づけを、紅茶を通して考えても良いのではないかな。さらに、ソフト面の方策としては、地域を象徴する雲巖寺や茶畑、須賀川と言えば「○○○だよね」という部分を地域の皆さんでより磨きをかけて発信するということがあると良い。地域外の人はもちろん、地区内の人に対しても、私たちの地区はこれが「売り」だという活動があって、それが根づくとな本物になる。



- (2) 若い人を巻き込む

地域の方々の率直な気持ちは、「若い人の力が欲しい」ということ。地区内で足りない部分は外に求めることになるが、例えば、県内のNPO法人が活動のフィールドを探していて、「ぽ・ぽ・ら」で農村と企業をテーマにミニサロンを実施したところ、栃木市で活動する若者が来てくれたが、市街化調整区域で空き家を改修して民泊にする場合、用途変更が必要でなかなか難しいということ。逆に、須賀川地区にはその制限がないので、農村に関心を持ち、ここで活動してくれる人を探すと、更に活動が持続して、地域の活力につながることを期待できると思う。

(3) 林業の歴史による地域力を活かす

地区の方の県民性が、経済的にガツガツしておらず、交流する時に少しでもビジネスにして、まちづくりの資金を生み出す仕掛けづくりをしようという話に持っていけない。優しくお客様をお迎えし楽しみたいという印象があるが、これは、林業の歴史から来るのではないかと思った。昔は、林業家の収入は1年1千万円、今で言う数千万円、それがこの地域の文化的遺産として残っているのではないか。木の技術と財力が地域にあったので、荘厳な雲巖寺、古民家の中庵、旧須賀川小学校の立派な校舎、持仏堂などの貴重な資源が今に残っている。また、茶畑のお茶を飲む文化は、豊かな地域性から伝わって来たようにも思う。そういった貴重な歴史や文化が今に残り、その価値を現代にいかにか活かすかが大事である。雲巖寺は厳格な修行道場なので、ビジネスの話は難しいとは思うが、ビジネスに長けたお寺だと、僧坊で精進料理を出してビジネスにしている。カレッジでのお母さんたちの料理も十分に精進料理であり、農村の食文化を上手く活かしていければ良いと思う。また、雲巖寺の参拝者をそのまま通過させているのはもったいないので、中庵をカフェとして活用することも検討できると良い。



◇雲巖寺◇



◇持仏堂◇

(4) 林業再生への期待

林業再生について、現在、ヨーロッパでは、日本と違うやり方で、より強度の出る新たな技術が開発されて、高層の建物が木造で建っている。細い間伐材を縦横（CLT）に組み合わせるとコンクリート並みの強度で、軽いし断熱性も良いという高層住宅の技術が開発されている。非常に有望なのが、CNF（セルロース・ナノ・ファイバー）で、植物繊維の10億分の1、細かく砕きまた接合すると自動車のボディも作れるもの。日本においては、地震の心配があるので、柱の接合部の補強が上手くできれば高層化できるということが研究されており、3階建てを全部木造でという例は既にある。今後、日本の建築物も、選択肢の1つとして木造ということがもっと進めば、林業が復活する可能性も高いので、昔途絶えた流れが復活する可能性が高いと思う。あと10年も経つと林業の風が変わり、大きな産業の変化があるのではないか。今が林業の底で、ここで持ちこたえれば、これから回復していくことに希望を持って良いのではと思う。林業はビジネスチャンスなので、林業を再生する取組をすべきである。

日本のように、黙っていても雑草が生える国は世界にそう多くはなく、それだけ植物資源が豊富な国である。既に林業を諦めた方も、近い将来を見て頑張りたいと思う。また、限界集落という言葉ができて20年だが、自分の息子や孫たちが、大田原市や近隣に住んでいる方も多いのではと思うが、そういう方も地域の力。住んでいるのはお年寄りばかりで、子どもたちが出ていったとしても、何かあればすぐ息子が来るよという、それが限界集落を支える力である。ぜひ、この地域の立派な資源に期待して欲しい。



【第3回 宇都宮市ぽぽらカレッジ】

- 1 日 時：平成 28 年 12 月 11 日（日）
10：00～15：00
- 2 会 場：ぽ・ぽ・ら
- 3 参加者：34 名
- 4 テーマ：とちぎの歴史・文化・自然を強みに
- 5 プログラム

- (1) 講義「コミュニティの元気は人と人のつながりの中で生まれる」

ー歴史・文化・自然を目覚めさせるカー

とちぎ協働デザインリーグ理事／作新学院大学特任教授 橋立 達夫

- (2) パネルディスカッション

- ・やみぞあづまっぺ協議会 会長 鈴木 一利氏
 - ・国本地区づくり振興会資源保全部会 ふるさと再発見探訪の会 代表 川村 泰一氏
 - ・宇都宮市市民まちづくり部みんなでまちづくり課 課長補佐 井上 俊邦氏
- 進 行：とちぎ協働デザインリーグ 主任研究員 小針 協子

まとめ：とちぎ協働デザインリーグ理事／作新学院大学特任教授 橋立 達夫

- (3) 意見交換会（ポスターセッション）・交流

6 まとめ

- (1) 講義「コミュニティの元気は人と人のつながりの中で生まれる」



人を動かすことは、「感動で人を動かす」ということ。何かをやると、地域の人たちの感動が見えてくと思うが、実際にやってみて、成功体験なり何なりして、「ああ面白い」、「確かにこれは大事なことでやらなければいけないよね」と気づきが重なり、人が動き出す。最初にやるべきことは、皆の共感を得るような企画を考えることで、そこからまちづくりは始まる、地域にとって、来た人に本物の体験を通したプライスレスの感動を味わってもらう、そこに集中したら面白いことが起こるかもしれない。最良の計画は、共感を生む計

画、それを目標に掲げる。「やねだん」のような、自分たちの事業資金を自分たちで稼ぐ仕組みを作ることが一つにはある。皆が幸せになる道筋を考え、皆が共感できる目標に掲げることにより、一人ひとりが自分のできることをできる範囲でやる、そのように、住民が前向きに生きる状況を作ること、まちづくりは進むと思っている。コミュニティの元気は、人と人とのつながりの中で生まれる。

- (2) パネルディスカッションから～今後の展望
ア 鈴木氏（やみぞあづまっぺ協議会）

やみぞあづまっぺ協議会は紅茶を中心に活動しており、今年で3年目である。去年から、本格的に紅茶の販売を始めたが、まず、販売ルートをどうしたら良いか、いかに販売をしていくかが課題である。また、協議会としての悩みは、人をまとめていくことが一番難しいと思っている。やはり、人をまとめていかないと事業が進んでいけないため、仲間づくりが一番大事と思っている。さらに、事業をしていく上では、運用資金もどうしていったら良いかが悩みである。



イ 川村氏（国本地区づくり振興会）

「宝木用水（新川）物語」を作るに当たり、予算をどうするかというのが一番大変だった。そこで、国本地区づくり振興会で予算を何とかしてもらおうと検討したが、なかなか難しかった。そのような中、宇都宮市の「地域みんなの夢実現事業支援補助金」、栃木県の「わがまち協働推進事業」があると、地区センターから助言をいただき、補助を受けることができた。地区づくり振興会からも補助してもらい、上手くクリアできた。地区センターが拠り所になり、私たちの大きな力になっている。

今後については、地域の人たちにもっと知っていただき、一緒に活動していただくために、小学生、また、中学生の活躍を期待しており、私たちも頑張っていきたい。やはり、大変なのは人づくりで、人が足りないのは一番の課題である。これも、現地視察などの中で、1人でも2人でも上手く引っ張り上げられれば良いと思っている。

ウ 井上氏（宇都宮市みんなでまちづくり課）

地域資源の活用の流れを整理すると、地域資源という原石を探し評価することにより磨きかけられる。そして、活用することにより、地域経済の活性化や地域環境の保全、地域社会の形成が図られ、住民が誇れるまちづくりにつながる。地域の歴史・文化・自然を活用することは、先人と現在の人々とが時間軸で結ばれ、未来につなげることができる。また、地域外の人々と交流することにより、地域間の連携強化や更なる地域愛の醸成などが図られていく。地域が活性化することで一番の恩恵を受けるのは、その地域に暮らしている人々であり、地域資源を次の世代に引き継ぐためには、自分たちの地域に誇りを持って、自信を持って、次の世代に引き継ぐような環境づくりが必要である。



(3) 意見交換会（ポスターセッション）・交流

参加者の皆さんに、それぞれの地域や団体の活動状況等をポスターにまとめて持ち寄っていただき、ポスターセッションの時間を設け、お茶を飲みながら意見交換し、交流を深めていただいた。



■コミュニティカレッジ 成果と課題

地域研修会は、ホストコミュニティのご協力により、充実した内容となった。晴天の下、気持ち良くまちあるきが実施でき、ホストコミュニティから詳細な説明をいただき、地域についての理解をより深めることができた。ワークショップでの意見交換も活発に行われた。一日のプログラムが多いため、時間的な余裕がなくなったことは反省点である。全体研修会では、講師から、全国事例を交えて3回カレッジのまとめを講義いただき、参加者から好評を得た。パネルディスカッションでは、3名のパネリストから、苦労話も含め貴重な意見をいただいた。ポスターセッションには沢山の展示物を持ち寄っていただき、参加者同士がリラックスした雰囲気の中で交流することができ、効果的な企画となった。全3回の受講シートには、研修内容は概ね良好という意見が多数であった。カレッジ参加者は広く一般から募集しているが、栃木県コミュニティ協会会員以外や若年者層の参加が少ないため、より一層、研修内容や広報の方法を工夫する必要がある。

若者の社会貢献活動参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）

1 趣 旨

社会貢献活動の担い手として、若者がボランティア活動に積極的に参加することが望まれているが、現状では若者の社会貢献活動への関心や参加率が、他の世代よりも低い状況にある。一方ボランティア団体等においては、慢性的な人材不足による活動の停滞という問題を抱えている。

このため、若者の社会貢献活動への関心や意欲を喚起し、活動参加を促進するためのイベントを開催し、もって地域における社会貢献活動の担い手確保・育成を図る。また、地域の中間支援組織（市町中間支援センター、市町村協等）とも連携し、各地域において活動を支援する組織と若者とが直接出会い、つながりを深める場とすることを目的とする。

2 概 要

年間テーマ：若者が見つける、ソーシャルな生き方！

県央地区 テーマ：若者がつくる未来の地域空間

日 時：平成 28 年 10 月 15 日（土） 13:00～16:30

会 場：宇都宮大学峰キャンパス構内 峰ヶ丘講堂

講 師：石井 大一郎氏 宇都宮大学地域デザイン科学部准教授

モデレーター：坂本 文子氏



峰ヶ丘講堂の空間活用

宇都宮大学地域デザイン科学部附属地域デザインセンターコーディネーター

主 催：栃木県／とちぎ協働デザインリーグ

協 力：宇都宮大学地域デザイン科学部附属地域デザインセンター

対 象：社会貢献活動・ボランティア活動・NPO活動等に関心のある若者

参 加：41 名（団体 8 団体 9 名、一般参加者 32 名）＋事務局等 9 名

参加団体：

① マチナカプロジェクト	② オレンジサロン 石蔵カフェ
③ 認定 NPO 法人 だいじょうぶ	④ 暮ら箱 kurahaco
⑤ HAYAKIKAZE café	⑥ MAKANA こども食堂
⑦ 昭和こども食堂	⑧ NPO 法人 くまの木 里の暮らし

内 容：

①本日のねらい（事務局） 	②キースピーチ（講師） 	③ゲストスピーチ（大波氏） 
④リレートーク 	⑤フリータイム 	⑥訪問プランを作成 

⑦訪問プランの発表	⑧まとめ	⑨最後に
		

「地域のなかで人が集う場所」を創出している団体と若者が気軽にふれあい、次のステップ（若者の参加）につながるプログラムを意識して実施。リレートークでは、団体の課題意識や具体的な活動内容等が語られた。フリータイムでは、若者が、関心のある団体（複数）のブースに出向き、意見交換を行った。その後、若者と団体が共に「訪問プラン」を考え、発表した。

講師によるまとめでは、訪問プランまでの流れを受けて、「これから増えるといい未来の地域空間」について、次のようなキーワードで表した。①安心して、認めあえる空間 ②発見・学びがある空間 ③互いに活かしあえる空間 ④個性を出しあえる空間 ⑤たくさんの人と関わりあえる空間 ⑥共同して何かをやれる！空間 ⑦学校と家庭以外のもうひとつの場。終了後には、ふりかえりを兼ねて、団体同士の交流の場を設けた。

県北地区 テーマ：出会う！ 見つける！ ボランティア
日 時：平成 28 年 12 月 10 日（土） 13:30～16:30
会 場：大田原生涯学習センター

講 師：大石 剛史氏 国際医療福祉大学准教授

協 力：国際医療福祉大学 IUHW ボランティアセンター、
大田原市、大田原市社会福祉協議会、
那須塩原市社会福祉協議会、世代間交流喫茶「いってみっけ」、ユアドリ、
世代間交流プロジェクトチーム「つむぎ」、タウンメディア大田原「たうも」

参 加：69 名（団体 10 団体 20 名、一般参加者 49 名）＋事務局等 7 名

参加団体：



① 世代間交流プロジェクトチーム つむぎ	② 家庭教育オピニオンリーダー連合会 黒磯支部 たんぽぽの会
③ 那須塩原市高校生ボランティアグループ たんぽぽの会	④ 一般社団法人つばさ
⑤ えきっぷくろいそ (黒磯駅前活性化プロジェクト)	⑥ 那須塩原市協働のまちづくり推進協議会
⑦ 大田原国際交流会	⑧ 那須塩原市国際交流協会
⑨ フードバンク大田原 (認定 NPO 法人とちぎボランティアネットワーク)	⑩ 子ども食堂「キッチンとまと」

内 容：

①本日のねらい（事務局）	②キースピーチ（講師）	③高校生スピーチ（八木澤さん）
		

④団体PR	⑤ブース訪問	⑥若者ふりかえり
		
⑦若者の意見発表	⑧団体ふりかえり・意見まとめ	
		

県北地域での事業開催にあたっては、講師の意向により実行委員会形式で企画運営を実施した。特に、若者の社会参加に関心の高い地域のキーパーソンが集まってきたため、参加者募集も実行委員によるところが大きかった。講師のキースピーチ（若者の社会貢献活動についての社会的意義等）のみでなく、高校生のスピーチ（どのような思いをもって、どんな地域活動をしているか等）があったことで、参加者は、同世代の実践者の言葉に耳を傾け、社会貢献活動をあまり堅苦しくなくとらえることができた。

ブース訪問では、地域での活動を丁寧に説明する団体の姿と、熱心に質問を投げかける若者の姿が見られた。この意見交換を通じて、団体側の参加者は未来への希望を見出し、次世代育成に向けての自らの課題を強く認識したようだった。

ふりかえりでは、若者同士がグループに分かれ、どのような情報を収集してきたか、また、団体との意見交換を通じて、どんな気づきがあったか、今後どう活かしたいか等、若者同士で意見交換をした。同じ時間を利用して団体同士も別室にて意見交換をもった。

県南地区 テーマ：見つけよう！ 始めよう！ ボランティア

日 時：平成 29 年 1 月 18 日（水） 18:30～20:30

会 場：白鷗大学東キャンパス（201 教室）

講 師：結城 史隆氏 白鷗大学教授

参 加：55 名（団体 14 団体 23 名、一般参加者 32 名）＋事務局等 7 名

参加団体：



発表の工夫

①	キラリ子ども未来塾	②	チャウス自然体験学校
③	NPO法人 栃木おやこ劇場	④	社会福祉法人 イースターヴィレッジ 自立援助ホーム マルコの家
⑤	NPO法人 トチギ環境未来基地	⑥	NPO法人 自然史データバンク アニマ net
⑦	わたらせ未来基金	⑧	NPO 法人 太平山南山麓友の会
⑨	株式会社 きぼう国際外語学院	⑩	栃木ウーヴァフットボールクラブ
⑪	マチナカプロジェクト	⑫	県南圏域障害者就業・生活支援センター 「めーぶる」
⑬	NPO 法人 ワーカーズ・コレクティブ たすけあい大地 「カフェ・あおぞら」	⑭	とちぎ・ボランティア団体 YAMBE

内 容：

①はじめに（講師）	②団体のアピールタイム
	
③若者と団体の交流タイム	
	

参加団体を14団体と設定し、より多くの団体と若者が直接出会うつながりを深めることを一番のねらいとした。そのため、プログラムは、「1. ボランティア団体アピールタイム（1団体30秒程度）」、「2. 若者とボランティア団体との交流タイム」、「3. ふりかえりとまとめ」というシンプルな組立てとした。

団体には、「若者が興味のある3団体を選び、3回にわたり（1回15分）交流する時間を設ける」ことを伝え、交流の内容についても「学生と一緒にやりたいことやボランティア内容をわかりやすく紹介する」ことや、「一方的な説明ではなく学生の気持ちや意見を聞きながら交流してほしい」等、プログラムや内容に関する必要事項を事前に伝えた。そのため、30秒スピーチや活動の説明資料等において工夫が見られた。ふりかえりでは、若者の「もっともっと話したかった・聞きたかった」また、「行けなかった団体に聞きたいこと」などを書き出し、その場でいくつかの質疑応答をした。若者が書き出したふりかえりは、事務局で整理し、後日参加団体に提供した。

3 成果と課題

平成27年度の本事業の課題を整理し、次の3点に留意しつつ企画実施にあたった。①若者参加者の年齢の幅を少し広げる（特に高校生に呼びかける）。②内容が充実していても、おとなたちばかりが話をし、若者が聞き手に回ってばかりにならないように（若者も積極的に意見を出せる工夫）③地域課題を解決している団体と若者が知り合う場の必要性は十分に確認できたので、次のステップとして、実際の行動（若者が団体の活動の現場を訪問する・ボランティア参加する等）につながるような、もうひと押しの企画とした。その結果、高校生の参加者が格段に増えた。おとなと若者双方が積極的に意見交換をした。3月に実施したフォローアップアンケートでは、事業後、行動につながったという報告が多く見られた。

地域団体からは、組織としての資質向上も必要という声があり、おとな側の学びも大きかった。

企業の協働参加促進事業（栃木県県民生活部県民文化課）

1 趣 旨

企業は、人材、資金、地域とのつながりを持ち、協働における重要な役割を担うことを期待されている。しかし、「栃木県企業の社会貢献活動に関する実態調査」（平成23年）では、何らかの社会貢献活動を行っている企業が7割に達する一方で、NPO等との連携・協力を行っている企業は、調査対象の約3割弱に留まっている。その内容も寄附やNPO等の会員になることなどであり、多くの企業がNPO等との協働の事業を実施するまでに至っていない。

そのため、社会貢献に取り組んでいる県内経済団体（栃木県経済同友会、栃木県経営者協会、青年会議所等）や各市町で地域のNPO等の活動を支援する市町中間支援センターと協力し、説明会・相談会の開催や、企業の協働への理解、参加促進を図る。併せて、企業とNPO等との協働対話フォーラムを開催し、実際の協働事業の実施につなげることを目的とする。

2 概 要

(1) 企業経営者・従業員向け協働セミナーの実施

栃木県経済同友会、栃木県経営者協会等の県内経済団体や、各市町で地域のNPO等の活動を支援する市町中間支援センターと協力し、企業経営者・従業員向け協働セミナーを年3回開催した。NPO等との協働の意義、それらが企業にもたらすメリット等の説明、具体的な事例の紹介などを行い、企業の協働への理解促進と参加を促した。

【第1回】

日時：平成28年10月20日（木）10：30～11：30

会場：栃木明治牛乳株式会社 会議室

対象：栃木明治牛乳株式会社経営者及び従業員

参加人数：21名

プログラム：講演『企業の社会貢献活動の現状について』

発表：NPO法人宇都宮まちづくり市民工房 常務理事 安藤正知 氏



【第2回】

日時：平成28年10月25日（火）15：30～17：30

会場：栃木県庁 研修館302研修室

対象：一般公募 経営者及び従業員

参加人数：18名

プログラム：

1). 第一部 講演『社会貢献活動、協働で企業を強くする』

発表：とちぎ協働デザインリーグ 理事長 三橋伸夫

- 2). 第二部 パネルディスカッション ～スマイル日光プロジェクト協働事例紹介～
 コーディネーター：とちぎ協働デザインリーグ 理事長 三橋伸夫
 パネリスト：株式会社成文社 常務取締役 小栗卓氏
 NPO法人はばたき 理事長 広瀬浩氏
- 3). 第三部 交流会



【第3回】

日時：平成28年11月18日（金）13：30～16：00

会場：栃木県庁 昭和館4階 多目的室4

対象：一般公募 経営者及び従業員

参加人数：23名

プログラム：

- 1). 第一部 講演『ボランティアとは、NPOとは、協働とは、協働事例紹介』
 発表：とちぎ協働デザインリーグ 横塚恭宏
- 2). 第二部 講演『実際に企業がNPOと協働している取組』
 ～企業が社会貢献しNPOと協働するメリット～
 発表：有限会社アップライジング 代表取締役社長 齋藤幸一 氏
- 3). 第三部 交流会



(2) 企業とNPO等との協働対話フォーラムの開催

経済団体の協力を得て、社会貢献活動、協働等に関心のある企業の担当者を対象に協働説明会（講演）及びNPO等との協働相談会を実施した。内容は、「企業経営者・従業員向け協働セミナー」の結果を踏まえた内容とした。また、企業とNPO等との協働マッチングを促進するために、企業・NPO等相互から1分間スピーチの時間を設けた。

開催日時：平成29年1月26日（木）12：30～16：30

会場：栃木県庁 研修館4階講堂・402・401

参加人数：71名（企業24名、NPO16名、行政22名、一般7名、報道2名）

プログラム：

第1部 基調講演「発想の転換が生み出す協働と地域活性化への歩み」

発表：いすみ鉄道株式会社 代表取締役社長 鳥塚亮 氏



第2部 企業とNPO等との協働相談会&名刺交換会

内容：企業・NPO等の1分間スピーチ、企業とNPO等との協働相談会及び名刺交換会

参加人数：32名（企業12社15名、NPO14団体17名）



3 成果と課題

企業の協働参加促進事業は今年度で3年目となり、県内経済団体や市町中間支援センターと連携協力しながら企業経営者・従業員向け協働セミナーを3回実施した。1回目は「栃木明治牛乳株式会社」の経営者及び従業員の方々に、社会貢献活動・協働について説明会を実施した。その後、従業員、経営者共に社会貢献活動に興味関心が生まれ、前向きな検討が行われた。2回目、3回目は、県内企業経営者向けに協働セミナーを実施した。日光市の協働事例「スマイル日光プロジェクト」や「有限会社アップライジング」の協働事例を紹介し、理解を深めた。アンケート結果では、協働への理解や関心を得ることができたという意見が見られた。

「企業とNPO等との協働対話フォーラム」の基調講演では、千葉県いすみ市にあるいすみ鉄道株式会社から、「協働」の取組で赤字路線を復活させた手法について講演をしていただいた。参加者アンケートでは、「協働の理解ができた」との回答が80%以上であった。また、その後実施した協働相談会では、企業、NPO等がお互いに事業内容や協働したいことについて1分間スピーチを行い顔の見える関係性を作った。こうしたことから、2交替制の協働相談会では、話をしてみたい企業・NPO等の座席へ移動していただき活発な意見交換が実施された。別会場では名刺交換も実施され、和やかな雰囲気の中、企業とNPO等が交流していた。また、フォーラムへの参加後、企業とNPO等が協働について検討していきたいという案件が数件あり、今後の進捗を見守るとともに、適宜助言していきたい。

今後の課題として、協働相談会への企業・NPOの参加数を増やせるよう努力が必要である。そのためには、県内経済団体等との連携協力や周知広報の工夫も必要と考える。また、協働のマッチング率を向上させるため、企業側・NPO側相互の情報を事前に情報提供し、理解を深めておくことも必要と感じた。

1 趣 旨

平成25年度から、県内のグリーン・ツーリズムに取り組む様々な団体や個人で構成する「栃木県グリーン・ツーリズムネットワーク（以下、ネットワーク）」を運営している。

今年度は、グリーン・ツーリズムの推進による農村地域への誘客促進を図るため、ネットワークを運営するとともに、「食の街道」や「とちぎのふるさと田園風景百選」等の取組と連携し、滞在型の栃木県グリーン・ツーリズムや訪日外国人旅行者の受入など、多様な旅行者のニーズに対応した受入態勢の検討を行うことを目的とする。

2 概 要

■栃木県グリーン・ツーリズムネットワークの運営

ネットワークの事務局を担い、県内のグリーン・ツーリズムに関する問合せの対応やネットワーク会員の募集等、ネットワークの運営管理を行った。

■調査研究

「食の街道」や「とちぎのふるさと田園風景百選」をはじめとする地域資源や地域課題等をそれぞれ整理し、グリーン・ツーリズム推進上の地域課題等の対応策をモデル的に調査・検討するため、県内の3農業振興事務所に協力いただき、滞在型のグリーン・ツーリズムをテーマに2カ所、訪日外国人旅行者の農村地域への誘客をテーマに1カ所、計3カ所についてワークショップ等の開催及び誘客プログラムの実施、反省会を開催した。

(1) 南那須地方

①第1回検討会 平成28年11月17日（木）

南那須地方のネットワーク会員をはじめとするグリーン・ツーリズム関係者、南那須地方市町職員、塩谷南那須農業振興事務所職員（参加者：27名）を対象に、南那須地方グリーン・ツーリズムに関する調査報告、取組発表、地域資源等に関する意見交換（ワークショップ）を行った。事前に地域資源の位置と内容を記入した塩谷南那須管内の地図を用い、塩谷南那須地方外からの滞在型の来訪を想定し、四季カレンダー及びルートづくりを実施し、課題の抽出及び発表を行った。



②第2回検討会 平成29年1月10日（火）

第1回検討会の振り返り及びモデルプログラム実施を前提にした課題抽出及び実施モデルプログラムの検討を行った。検討会では、「モデルプログラムを通して、適正価格、体験の満足度、モデルプログラムの質を検証したい」との意見とともに、「まずはチャレンジしてみることが重要だ」、「南那須らしさとして、食べ物、八溝山系の景観、食と農、さらに、人との交流を強調できるとよい」などの意見が交わされた。



③モデルプログラムの実施 平成29年2月11日（土）～12日（日）

参加者：首都圏在住モニター6名（大人3名、子供3名）

行 程：（1日目）松月庵（昼食）－島崎酒造（洞窟酒蔵見学）－島崎酒造－菜花の庄（味噌づくり体験）－ゆりがねの湯（入浴）－菜花の庄（夕食）－地域紹介－菜花の庄（宿泊）



(2日目) 菜花の庄(朝食)ー小砂散策ー道の駅ばとう(昼食)ー大野果樹園(にんじんドレッシングづくり)ー大野果樹園(意見交換・反省会)

参加者からは、「美味しいものをいただけたし、地元の方とふれあい、温かさを感じたのでよかった」、「農泊はとてもアットホームで家にいるような感じでゆっくりと過ごせた」、「自分で再訪する際の交通手段が課題」などの感想が寄せられた。

(2) 芳賀地方

①第1回検討会 平成28年12月5日(月)

芳賀地方のネットワーク会員をはじめとするグリーン・ツーリズム関係者、芳賀地方市町職員、芳賀農業振興事務所職員(参加者:48名)を対象に、国等のグリーン・ツーリズムに関する動向、農家民宿の取組発表、農家民宿の開業についての説明及び意見交換を行った。意見交換では、地域外からの来訪者へのコーディネート機能やどういう旅行者を呼び込みたいかなどについて、率直な意見が交わされた。



②モデルプログラムの実施 平成29年1月7日(土)～8日(日)

参加者:県内大学生 4名

行程:(1日目)ひなた農園集合ーオリエンテーションー収穫体験ー道の駅はが(買い出し)ー夕食作りーロマンの湯(入浴)ー夕食及び意見交換ーひなた農園(宿泊)



(2日目) 散策ー出荷体験ー餅つきー意見交換ーいちご狩り

意見交換では、参加者である県内大学生の他、観光協会の方も交えて農泊計画書をたたき台にした各項目の検証、四季カレンダーに基づく体験プログラムや食事メニューの検討などを行った。「古くから地域に伝わる文化(神楽や家庭料理)の伝承のためにも、地域住民がその価値を再認識するとともに、地域外の人に評価してもらうことが効果的である」、「芳賀地方の観光イベントの把握と連動させた集客ができる」とよいなどの意見が交わされた。

③第2回検討会 平成29年3月7日(火)

芳賀地方のネットワーク会員をはじめとするグリーン・ツーリズム関係者、芳賀地方市町職員、芳賀農業振興事務所職員(参加者:32名)を対象に、モデルプログラムの報告、旅館業法及び食品衛生法に係る留意点の検討を行うとともに、農家民宿開業を検討している方を対象にした個別相談を実施した。

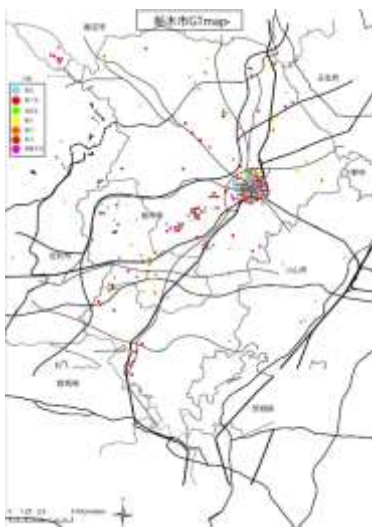
農家民宿開業を目指す農家からは、「簡易宿所の許可を取るには改築などが必要になり、相当の経費がかかるのでは?」などの具体的な質問が上がり、特例簡易宿所の条件やその他農家民宿開業に際しての様々な不安を解消するきっかけとなり、農家民宿開業へ向けての後押しとなった。



(3) 下都賀地方

①第1回検討会 平成29年1月16日(月)

下都賀地方のネットワーク会員をはじめとするグリーン・ツーリズム関係者、下都賀地方市町職員、下都賀農業振興事務所職員(参加者:20名)を対象に、各ネットワーク会員の取組紹介及び管内地域資源等に関する意見交換(ワークショップ)を行った。



②モデルプログラムの実施 平成29年2月20日(月)

参加者:在日外国人留学生9名

行程:宇都宮大学出発ー炭焼き体験・玉串奉納体験ー昼食ーみそ作り体験ー二俣収穫体験ー意見交換ー宇都宮大学解散

意見交換では、「普段体験できないことができて楽しかった、楽しい思い出ができた」、「皆さんとても優しくかった」など満足度が高く、また、受入先の方も外国人の受入に抵抗がない様子がみられた。一方で、Wi-Fi環境、現地における交通の利便性、外国語表記などのニーズも浮き彫りになった。



3 成果と課題

今年度は、滞在型のグリーン・ツーリズム及び訪日外国人旅行者の受入をテーマに、3地区において地域資源の活用と旅行者の受入に向けた課題の洗い出し、モデルプログラムの実施による検証と課題提起及び地域内におけるグリーン・ツーリズム関係者間の交流・連携促進に取り組んだ。モデルプログラムの実施では、参加者の率直な意見を収集し地域側にフィードバックすることで、今後の事業展開につなげるとともに、地域の意欲向上にもつながったと思われる。農家やグリーン・ツーリズム関連事業者の個々の取組を相互に連携させることは、地域の魅力をより高め誘客の増加を図ることにつながる。今年度の取組により、ネットワーク会員を始めとする農家やグリーン・ツーリズム関連事業者が連携することの有効性を、地域の方を始め市町・農業振興事務所職員にも実感していただけたのではと思う。また、資源の限られた農家や小規模事業者においては、誘客につなげるために欠かせない広報活動も大きな課題である。それらの課題を克服し地域が自立していくためには、農村地域ならではの魅力発信と地域内連携を意識しつつ、ストーリー性のある効果的な誘客戦略を描き、それに基づく企画や広報活動を担う中間組織やリーダーの育成・発掘が求められる。

中山間地域元気創出事業（企業連携促進事業：栃木県農政部農村振興課）

1 趣 旨

農村地域の過疎化、高齢化が今後ますます進展していく中で、企業などとの交流に意欲をもつ中山間地域と、農山村地域での農業や地域保全活動などの支援やビジネスチャンスの拡大など、農山村地域に関心のある企業とを結び付け、両者が連携した活動を継続的に推進することを目的とする。



2 概 要

■企業との連携を望む地域の発掘と登録

(1) アンケートの実施

中山間地域に該当する地域組織向けに地域の現状、課題、特有の資源及び企業との連携の意向を把握するためのアンケートを実施した。

配布先：中山間地域に該当する地域組織 234件

有効回答数：87件 回収率：37%

◆アンケート結果（右図参照）

取り組むべきだという課題意識を持つ地域は3分の1を超えており、企業との連携に期待を寄せる地域への今後の働きかけが成果につながる可能性を示唆する結果となっている。一方で、企業連携への不安を抱える地域や消極的な地域が相当数あることも事実である。

(2) 地域リストの作成

有効回答先87件について、アンケート集計・分析を実施し、関心度別地域リストを作成した。

(3) 地域カルテの作成

アンケート集計・分析結果をもとに、企業との連携の意向に積極的な地域組織を対象に個別に聞き取りを行い、地域カルテを作成した。

■地域との連携を望む企業の発掘と登録

(1) アンケートの実施

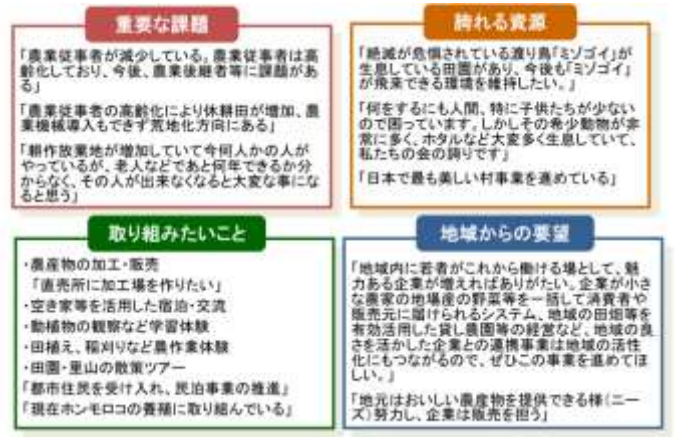
社会貢献活動に意欲的であると思われる企業を対象に、事業概要、理念、強み、課題及び地域との連携の意向を把握するためのアンケートを実施した。

配布先：とちぎ協働デザインリーグにおける過去の事業で関わった企業、経営革新計画承認企業、農村振興課関連事業で過去に関わった企業 303件

有効回答数：31件 回収率：10%

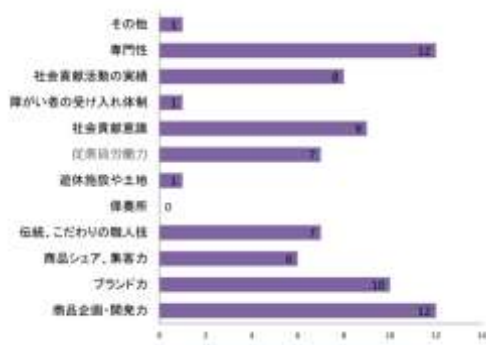
- ①企業との連携に取り組む意向
- | | |
|-----------------|-------|
| 取り組むべきだし賛成は得られる | 11.1% |
| 取り組むべきだが賛成を得にくい | 23.5% |
| 取り組むべきかどうか迷う | 49.4% |
| 取り組むべきとは思わない | 16.0% |

②企業との連携に前向きな地域の状況



◆アンケート結果

①貴事務所で誇れる事柄や活用できる資源



②貴事務所内で抱えている課題



③地域の方と協働で取り組みたいこと



④地域連携の意向



中山間地域との連携に前向きな企業が回収先の約7割となっている。もともと社会貢献に意欲のある企業がアンケートに回答いただいているとは言え、非常に高い数値を示しており、今後の活動に期待ができる。一方で、地域との連携に取り組む上で障害となる課題として、「従業員の時間的なゆとりがない」や「資金面で余裕がない」などの物理的な経営資源の不足も浮き彫りになっている。

(2) 企業リストの作成

有効回答先31件について、アンケート集計・分析を実施し、関心度別地域リストを作成した。

(3) 企業カルテの作成

アンケート集計・分析結果をもとに、地域との連携の意向に前向きな企業に対し、理解と関心を深めるために意見交換会を実施し、個別にヒアリングやフォローアップを行いながら企業カルテを作成した。

◆意見交換会の実施概要

趣 旨：中山間地域との連携に興味のある企業に対し、企業連携への関心を高めるとともに、意見交換を通して、事業の理解促進、課題の共有や連携の可能性を模索する。

日 時：平成29年1月13日（金）13：30～15：30

会 場：とちぎボランティアNPOセンター

参加者：企業13社 15名

内 容：中山間地域元気創出事業の概要説明、企業が地域と連携するメリットなど、意見交換会



3 成果と課題

本事業は、栃木県農政部農村振興課と連携し、今年度から開始した事業である。初年度の実施の成果としては、地域及び企業への連携に対する意向を把握するためにアンケートを実施し、積極的な地域・企業においては直接詳細情報を聞き取ることで、地域・企業各々の誇れる資源や抱える問題などの生の声を収集することができたことである。今後、両者のマッチングの段階においては、双方のメリットを見出し、継続的な連携を支援する仲介役のコーディネート力の向上が必要である。そして、地域及び企業双方の連携の目的が共有できること、互いの信頼関係を構築すること、地域リーダーを育成することなどが成果につながるポイントとなる。焦らず時間をかけて関係性を育てつつ各々の意向を踏まえて丁寧に進め、連携につなげていくことが重要であると考えられる。

地域活動サポート支援事業

（栃木県上都賀農業振興事務所）

1 趣 旨

鹿沼市立西大芦小学校は、平成 29 年度限りで閉校が決定しており、その跡地利用については、地域住民から地域活性化の観点から積極的な活用意向が示されていた。小学校は地域のシンボルの存在であり、地域住民の参画による充実した議論が必要であることから、利活用に係るワークショップを企画し、実施する。

2 ワークショップの企画と実施

上都賀農業振興事務所がワークショップを主催し、地域活動サポート支援事業ワークショップグループが参加するワークショップであり、その検討結果は、西大芦小学校利活用検討委員会に報告される。ワークショップのプログラム企画・実施はリーグが行うが、鹿沼市農政課、鹿沼市西大芦コミュニティセンターの支援を受けた。こうした体制の下、右の表 1 に示すように、全 4 回のワークショップを実施して地域住民の意向をとりまとめた。これらとは別に、農業振興事務所により地域住民が参加する先進地事例の視察が 2 回行われた（10 月 28 日、12 月 19 日）。

表 1 ワークショップの概要

		第 1 回 WS	第 2 回 WS	第 3 回 WS	第 4 回 WS
開催日		平成 28 年 9 月 1 日	平成 28 年 11 月 10 日	平成 29 年 1 月 12 日	平成 29 年 2 月 9 日
時 間		19：00～ 21：00	19：00～ 21：00	19：00～ 21：00	19：00～ 21：00
参 加 者	地域 住民	14 名	13 名	9 名	10 名
	主催・ 支援	8 名	6 名	6 名	6 名
内 容		主旨説明 利活用に関する自由意見交換	具体的な利活用内容・方法、予想される課題、関係して欲しい人材・地域団体の検討	校舎平面図を用いた活用スペースの検討 実施体制の検討	利活用の主な項目ごとの重要度・自力度の検討 提案書素案の検討

表 2 第 1 回ワークショップで出された意見の分類

分類	小分類	出された意見
農産物加工・販売施設	加工施設	加工所
	農村レストラン	お食事処
	販売施設	農産物直売所
地区拠点活動施設	地域団体事務所	地域団体事務所
		会議室
		新コミュニティセンター
	集会所	集会所
	お困り事解決センター	シルバーセンター
		草刈り・買物代行・有害獣駆除
	企業と連携した引き売り	企業と連携した引き売り
		企業と連携した引き売り
高齢者施設・住居・福祉施設	歴史資料館	歴史・文化の伝承
		歴史・文化の伝承
		歴史・文化の伝承
	高齢者施設	デイサービス
	老人ホーム	老人ホーム
		老人ホーム
		老人ホーム
	筋トレ・訓練施設	筋トレ・訓練施設
	配食サービス	配食サービス
		配食サービス
		配食サービス
	寮＋畑	寮＋畑
	障害者施設	障害者施設
		障害者施設
		障害者施設
	アパート	一人暮らし用の住居
	若者支援	若者支援
		若者支援
		若者支援
	診療所	診療所
都市住民との交流・宿泊研修施設	体験交流施設	自然体験
		木工体験
		農業体験
		こんにゃくづくり・そば打ち体験
	宿泊施設	宿泊室
		民宿・ペンション
		合宿所・トレーニング
		宿泊型の競技会
	川遊び関連施設	バーベキュー場
		バーベキュー材料の販売所
		着替え用ロッカールーム
		駐車場
		オートキャンプ場
		やな
		屋外コンサート場
		環境を考える場

3 ワークショップの実施結果

(1) 廃校の利活用の検討（第 1 回）

参加者をくじ引きで 2 グループに分け、廃校の利活用について各自が付箋に自由に記入した。活用の場所ごとに付箋の色を変え、小学校の近くにあるオートキャンプ場も含めた。具体的には“校舎”、“校庭”、“オートキャンプ場”、“その他”の 4 つである。記入された付箋は、あらかじめ用意した小学校の平面図や小学校周辺の地図に貼り、それら出された意見はグループごとに議論し整理を行った。それぞれのグループで整理された内容を、第 2 回以降で議論や検討が行いやすくなるように、「農産物加工・販売施設」、「地区拠点活動施設」、「高齢者施設・住居・福祉施設」、「都市住民との交流・宿泊研修施設」の 4 つに大きく分類した（表 2）。

(2) 具体的な内容、課題、人材の検討（第 2 回）

前回分類を行った利活用内容のうち、地域住民が主体となって取り組みを検討しやすいと判断される「農産物加工・販売施設」と「地区拠点活動施設」について、さらに具体的な内容を検討した。また前回出された案を実現していくためには、地域の体制づくりや継承が重要であるため、なるべく地域住民で運営が行えるように、地域の人材や組織の検討も行った。グループ分けは参加者が関心のある方を選び、選択したテーマについて、具体的な内容や方法、予想される課題、関係して欲しい人材や地元組織、についてそれぞれ付箋の色を変えて記入した。出された付箋は、第 1 回と同様に参加者によって整理を行った。「農産物加工・販

売施設」では販売・体験メニューとして、年間を通じて提供できるよう、四季に合わせた意見が出された。課題では生産者の確保や後継者育成、品数の確保などが挙げられた。「地区拠点活動施設」では高齢者の見守りや建物の修繕、草刈りなどを行う「お困り改善センター」や「地域団体事務所」、「バーベキュー場」などの意見が挙げられた。

(3) 平面図を用いた検討（第3回）

これまでのワークショップで得られた様々な意見や案を、校舎の部屋の大きさや設備を考慮し平面図上に落とし込み、利活用素案を作成した（図1）。1階は地域団体等の事務室や高齢者サロン、食品加工などの地域住民が主に活動する機能を配置した。2階は各種展示スペース、3階は自由に意見を出してもらうためそのままにした。この図面を基に、追加、修正、その他意見、の3つに付箋の色を分けて記入した。参加者がやや少なく、無作為に2グループに分けて図面を用いた検討を行った。その結果、様々な追加・修正等の意見が出されたが、両グループとも共通して宿泊機能の設置や図書室を地域の図書館にすること、保健室には地元の僻地診療所を移転させることが追加として挙げられた。また、コミュニティセンターやレストランの入口にスロープを設置するといった意見も挙げられた。

なお、運営事業や施設維持管理の方法及びその組織について、実施体制の検討を討議形式で行った。その結果、全体の調整や方針の決定を行う「ふるさと協議会（仮称）」の設置や宿泊等の地域だけでは負担が大きいものは外部委託することが挙げられた。

(4) 重要度・自力度の検討（第4回）

参加者の自由意志で2グループに分かれて、農業振興事務所で取りまとめた提案書素案の確認及び提案された10項目

（下記成果の項参照）について重要度（地域にとっての重要性）・自力度（地域だけでできるか）の評価を行った。重要度・自力度は、大（3点）、中（2点）、小（1点）のいずれかの旗を一齐に掲げて即時集計した（結果は略）。コミュニティセンター機能移設は重要度、自力度ともに満点で最も高い。重要度は高いが自力度が相対的に低い項目は、実現に向けて外部の協力を求めることも検討する必要があることが判明した。

4 成果と課題

全4回のワークショップでは、施設の利活用案、実施場所、実施体制等について、地域住民が積極的に意見を表明し、参加者全員で検討した上で下記のとおり提案を取りまとめることができた。

- ①農村レストラン及び農産物加工所を設置する。
- ②地域課題の解決を図るセンターを設ける。
- ③地域の高齢者等のためのサロンを設ける。
- ④西大芦コミュニティセンターの機能を移設する。
- ⑤地域団体の事務室を設ける。
- ⑥宿泊施設として整備する。
- ⑦川遊びのために地域を訪れる人向けの更衣室やロッカーを整備する。
- ⑧地域の文化資料及び小学校の歴史を展示するスペースを設ける。
- ⑨地域の料理講習等に活用できるスペースを設ける。
- ⑩現在地域内にある僻地診療所を移設する。

地域住民により持続した運営や活動が行えるよう、引き続き検討が必要であると考えられる。

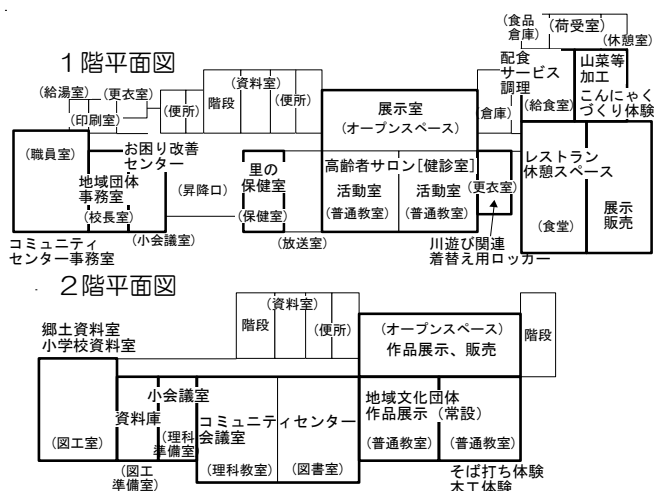


図1 西大芦小学校の活用素案（3階平面図は略）



写真 第4回ワークショップにおける「旗あげ」

＜参 考＞ とちぎ協働デザインリーグ 理事会・総会開催状況

1 第1回理事会

- (1) 日 時：平成 28 年 5 月 21 日（土） 16：00～17：30
- (2) 会 場：ぽ・ぽ・ら
- (3) 出席者：理事 6 名、委任状 5 名 計 11 名
- (4) 議 題
 - ① 役員改選
 - ② 規約の一部改正
 - ③ 平成 27 年度事業報告及び活動計算書報告
 - ④ 平成 28 年度事業計画（案）及び活動予算書（案）

2 平成 28 年度総会

- (1) 日 時：平成 28 年 5 月 21 日（土） 17：30～18：00
- (2) 会 場：ぽ・ぽ・ら
- (3) 出席者：会員 14 名、委任状 5 名 計 19 名
- (4) 議 題
 - ① 役員改選
 - ② 規約の一部改正
 - ③ 平成 27 年度事業報告及び活動計算書報告・監査報告
 - ④ 平成 28 年度事業計画（案）及び活動予算書（案）

3 第2回理事会

- (1) 日 時：平成 28 年 10 月 1 日（土） 16：00～17：30
- (2) 会 場：ぽ・ぽ・ら
- (3) 出席者：理事 8 名
- (4) 議 題
 - ① 平成 28 年度上期事業報告・下期事業計画（案）
 - ② 平成 28 年度活動予算書（補正案）

4 第3回理事会

- (1) 日 時：平成 29 年 3 月 4 日（土） 16：00～17：30
- (2) 会 場：ぽ・ぽ・ら
- (3) 出席者：理事 9 名、委任状 2 名 計 11 名
- (4) 議 題
 - ① 平成 29 年度事業計画（案）及び予算（案）
 - ② ぽ・ぽ・ら事業について

とちぎ協働デザインリーグ
平成 28 年度事業報告書

企画・編集
とちぎ協働デザインリーグ

発 行
とちぎ協働デザインリーグ